

アジア・太平洋研究センター主催，総合政策学部共催講演会 ＜シリーズ「朝鮮半島を俯瞰する」第5回＞

日 時：2021年1月26日（火）

場 所：南山大学 オンライン講演会

テーマ：ロシアから見た朝鮮半島

報告者：喜田 尚（朝日新聞モスクワ支局長）

シリーズ「朝鮮半島を俯瞰する」第5回講演会は、朝日新聞モスクワ支局の喜田尚支局長に講演をお願いした。北朝鮮の建国に深く関わったロシアの朝鮮半島に対する影響力はその重要性にもかかわらず必ずしも明確ではない。しかし、たとえば2002年から開始された北朝鮮の核問題を巡る6者会合の正式メンバーであるようにロシアが今後の朝鮮半島情勢に一定の影響力を行使することは間違いない。そうした観点から講演をお願いした。概要は以下の通り。

北朝鮮の首脳はソ連崩壊後、4度ロシアを訪問している。私は2001年以降2度モスクワに駐在し、3回の訪問を直接取材する機会に恵まれた。それぞれの訪問が、朝鮮半島情勢をめぐるその時々ロシアの立場を映し出すものだったとの印象を持っている。

ロシアは東アジア情勢に関与する足がかりとして、対北朝鮮関係を重視する。ソ連崩壊後から約10年は冷え込んだが、2000年に就任したプーチン大統領は直ちに復活に動いた。米国の「1極体制」に埋没することを拒み、アジア、中東、南米など広い地域にプレゼンスを得ようとしたプーチン氏にとって、北朝鮮と独自に対話できる関係は重要なソ連時代の「外交資産」のひとつだった。

だが、その後北朝鮮への関与がロシアの思惑通りに進んだとは思えない。4回の訪問のうち、金正日氏の2回目と3回目の間、また金正恩氏が後継体制を固めてから初訪問までにそれぞれ、9年、7年の間隔があいた。

プーチン政権1期目だった01年と02年の金正日氏訪問当時、米国のブッシュ政権は北朝鮮のミサイル開発を理由にミサイル防衛（MD）計画を打ち出していた。ロシアはMDは自国の核戦力を無力化すると恐れ、北朝鮮の柔軟姿勢を引き出すことで米国との交渉の主導権を握ろうとした。しかし、結局はブッシュ政権が02年末に米ロの弾道弾迎撃ミサイル制限条約から離脱した。プーチン氏にはこの経験が北大西洋

条約機構（NATO）の東欧拡大とともにトラウマとなり、対欧米強国路線にカジを切る大きな理由になった。

一方、このロシアの外交路線の変化で、北朝鮮にとって「中国とも米国とも対話できる」という同国の利点は半減した。金正恩氏の体制下で、ロシアの半島政策は中国との共同歩調の域を出ていない。19年4月の金正恩氏の訪問は関係維持の確認に終わった。

ロシア外交の変化は韓国との経済関係にも影を落としている。1990年の国交回復後、韓国企業はロシアへの進出を進めてきたが、貿易高は2014年のウクライナ危機で以前の55%に落ち、今も回復途上だ。ただロシアには韓国との関係強化に期待が強い。ロシアは中国との戦略的パートナー関係を進めるが、外交面の独立性は保ちたい。その意味で東アジアでは米国の同盟国である日本、韓国との関係が重要になる。ウクライナ危機で対ロシア制裁を避けた韓国は「日本より米国からの独立性が高い」と映っている。

（文責：平岩 俊司）